

<研究ノート>

1950年代前半における大衆娯楽雑誌の受容経験

——『平凡』の共同体的受容と共振性——

阪 本 博 志

0 はじめに

1950年代半ばに始まる高度成長が前近代から続く日本人の生活を根底から変えたことはよく知られている。たとえば、近代から1960年代初めまでの流行歌の分析を行った見田宗介は、1956-58年を、『もはや戦後は終わった』といわれ、団地族と家庭電化が流行語となり、テレビと週刊誌の急速な普及によって、日本人のコミュニケーション生活に構造的な変化のきざした時期であると言う。そして見田はこの時期の人びとの意識の変化を当時の流行歌の中に見出している¹。一方加藤秀俊は、1955年以降を「高級文化と大衆文化の中間をいく妥協の文化」²である中間文化の時代であるとしている。加藤によると1945-50年は「高級文化の時代」、1950-55年は「大衆文化の時代」であり、後者を代表するものとして『平凡』を挙げることができるという³。この1950-55年は同時に「構造的な変化のきざす直前の時期であるが、この時期における大衆娯楽雑誌『平凡』の誌面を検討するとともにその受容形態を明らかにすることが本稿の課題である。この時期『平凡』は急速に部数を伸ばし社会的に注目を集めていた。「構造的な変化」のきざす前のこの間、この時代を象徴するという大衆娯楽雑誌『平凡』に人びとはどのような受容経験を求めていたのであろうか。

『平凡』は1987年の休刊までに部数の飛躍的な躍進期を2度迎えている。その「2度の躍進期」とは、具体的には1950年代前半と1970年代前半の2度である。『平凡』の部数のデータは全て現存して

¹ 見田宗介『近代日本の心情の歴史 流行歌の社会心理史』講談社、1978年、191頁。また、高度成長期の社会変動を扱ったものとしては、吉川洋『高度成長 日本を変えた6000日』読売新聞社、1997年、ほかを、高度成長期を含む戦後社会の変動を概観したものとして見田宗介「現代日本の感覚変容——夢の時代と虚構の時代」『現代日本の感覚と思想』講談社、1995年、ほかを参照。芸能史に関しては、丸山鐵雄『歌は世につれ』みすず書房、1983年、伊藤強『それはリンゴの唄から始まった』駸々堂、1984年、朝日新聞学芸部『戦後芸能史物語』朝日新聞社、1987年、斎藤茂『歌謡曲だよ！人生は』『平凡』編集長の昭和流行歌覚え書』マガジンハウス、2000年、ほかを参照。

² 加藤秀俊「中間文化論」『中間文化』平凡社、1957年、19頁。

³ 加藤、前掲論文。なお、加藤のこの議論の戦後大衆文化（特に若者文化）における位置づけとしては、桜井哲夫『ことばを失った若者たち』講談社、1985年、ほかを参照。

いるわけではないが、幸いなことに両方の躍進期のデータは現存している。

図1 『平凡』1950～59年の発行部数の推移

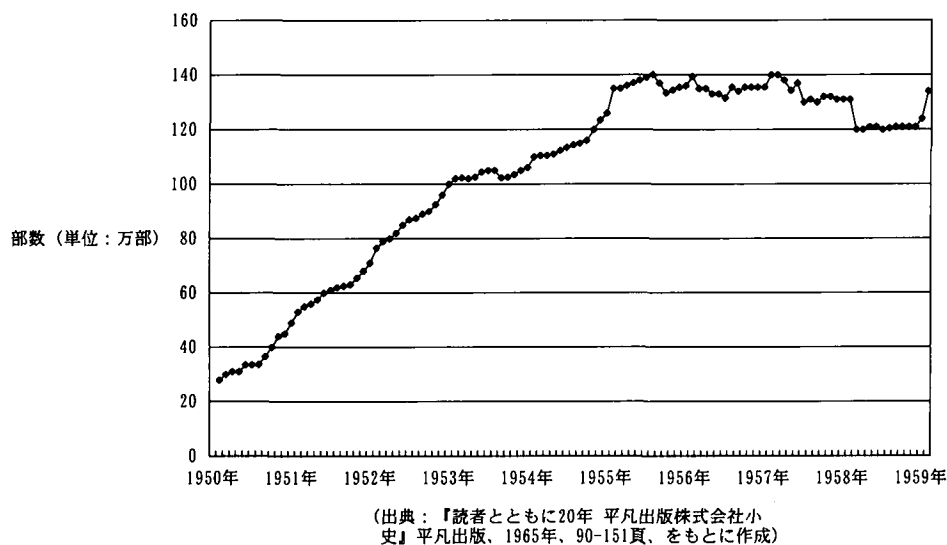
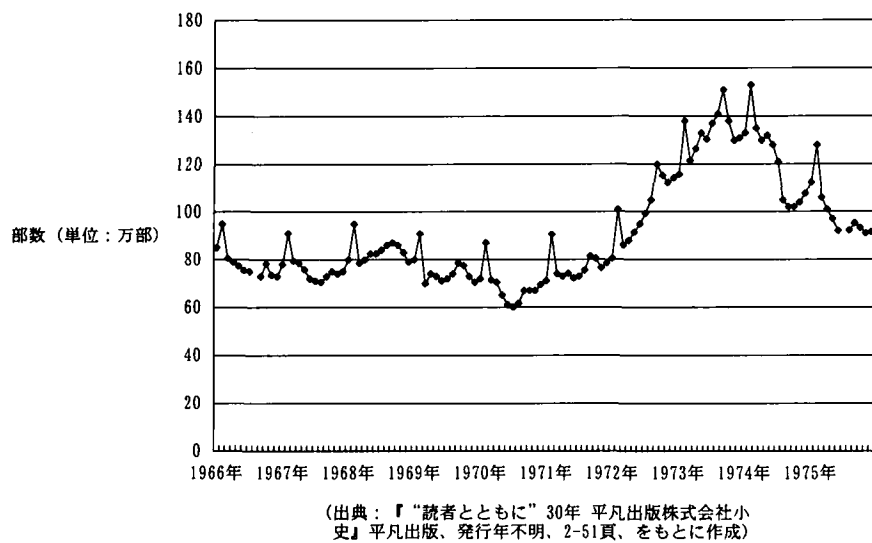
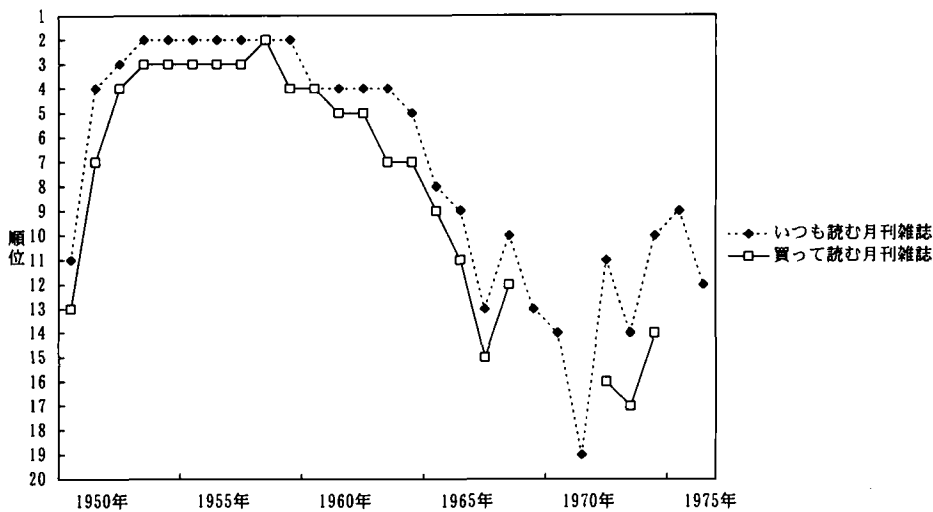


図2 『平凡』1966～75年の部数の推移



⁴ 岸本文隆氏（マガジンハウス常務取締役）、2000年10月5日。

図3 「読書世論調査」に見る『平凡』順位の推移



(出典：毎日新聞社編『読書世論調査30年 戦後日本人の心の軌跡』毎日新聞社、1977年、88、93頁、をもとに作成)

図1は1950年代における『平凡』の発行部数の推移を表したものである。ここから我々は1950年代前半における『平凡』の躍進を見て取ることが出来る。50年2月号は27万9千部発行であったこの雑誌の発行部数は55年6月号では140万部に至っている。図2は1966年から75年までの同誌の発行部数である。70年7月号の発行部数は60万1千部であったが、74年2月号は153万部を発行するに至った。この2つの躍進期を確認したあと図3を見てみたい。図3は毎日新聞社「読書世論調査」のデータを基に作成したものである。このグラフは、いわば読者全般の間における『平凡』の相対的位置を表したものと見てよい。テレビの本格的な普及が始まる1959年までのまだ「構造的な変化」がきざすだけの段階においては『平凡』の相対的位置は上位にあり、「構造的な変化」がドラスティックに引き出してから相対的位置は低下している。

これらを見るとき我々は或る奇妙な相反する事態に気づく。70年代前半における2度目の躍進期の方が50年代前半における1度目の躍進期よりも部数では上まわっているにもかかわらず、読者間での相対的位置は1度目の躍進期を下まわっているのである。このことは、次の2つのことを物語っている。それはまず、『平凡』は読者全般の間において第1の躍進期により重要性を帯びていたということである。次に、この2度の躍進期におけるそれぞれの読者の経験には質的差異の大きな断層が横たわっているということである。そして相対的位置の低下及び87年の休刊を考えると、大衆雑誌のこの受容経験を我々は失ってしまったのではないかと考えることが出来る。『平凡』は次章第1節で見られるように戦後大衆雑誌の原点に位置づけられうるとともに、戦後を代表する大衆娯楽雑誌であり、戦後日本の文化と社会意識を検討する上で欠かすことは絶対に出来ない。このことを鑑みると、この質的差異

の大きな断層が戦後大衆文化に対して持つ意味は、単に一雑誌の部数の増減にとどまらないものを含むと言える。以上から、「構造的な変化」がきざす前のこの1度目の躍進期において読者が『平凡』を通して得ていた経験は、戦後文化史研究にとって重要であると思われる。それは一体如何なるものであったのか。本稿においてはその受容経験を共同体的受容経験であると設定する。

本稿は、こうした問題意識のもと1950-55年における誌面の内容とその受容経験を検討するものである。続く1章においては、戦後大衆雑誌における『平凡』の位置を確認し『平凡』の大きな沿革を概観したあと、『平凡』の先行研究を整理し、問題設定を行う。そして2章では1950-55年における誌面をグラビア及び小説に分けそれぞれの受容経験を検討する。3章ではそうした受容を行っていた読者の姿を明らかにし、4章では以上の議論に考察を加える。

1 問題設定

『平凡』は戦後大衆雑誌の中でどのように位置づけられるのか。本章では、『平凡』の戦後大衆雑誌における位置づけを行いその沿革を概観したあと、本稿における問題設定を行う。

1-1 平凡出版⁵と戦後大衆雑誌

『平凡』を発行していた平凡出版は戦後大衆文化なかんづく若年層の文化を考えていく上で軸になる出版社であると言える。

近代以降の日本において各時代を代表する雑誌を発行した出版社を挙げるときに、明治の博文館・大正の実業之日本社・昭和戦前期の講談社と並ぶ戦後の出版社として、平凡出版を挙げることができるのではないだろうか。なぜなら、既に加藤典洋らが指摘しているように、昭和戦後期においては、平凡出版が新しい読者層を開拓することでその時代を代表する雑誌を創りだしそこに他の出版社が模倣誌を発行して追随するという構図が見られてきたからである⁶。たとえば、主に勤労青少年を対象とした『平凡』（1945年創刊、代表的な模倣誌に集英社『明星』）、若い男性を対象とした初めての週刊誌である『平凡パンチ』（1964年創刊、模倣誌に集英社『週刊プレイボーイ』）、それまでの日本には

⁵ ここで「マガジンハウス」という現在の社名を用いず「平凡出版」という名称を用いたのは、『平凡』を発行していた時期においてまた本節で問題にしている昭和戦後期においては「平凡出版」という社名が用いられていた時期が最も長いからである（次節で見るように『平凡』は、1945年10月に創立された合資会社凡人社より同年11月に創刊された。同社は1954年より平凡出版株式会社・1983年より株式会社マガジンハウスへと社名を変更した）。また、上述したように1983年に「平凡出版」は「マガジンハウス」となり、87年には『平凡』『週刊平凡』が88年には『平凡パンチ』が休刊し「平凡」を冠した雑誌は全て休刊した。80年代におけるこの一連の動きは、本節で取り上げている昭和戦後期という時代の終焉を象徴しているように思える。

⁶ 加藤典洋「『大』・『新』・『高』」『日本風景論』講談社、2000年、215-69頁、井上ひさし・筑紫哲也「雑誌の時代」『朝日ジャーナル』1985年4月1日臨時増刊号、7頁。

なかったサイズの雑誌でありかつ日本初のオールグラビア誌でもある、既製服を扱った雑誌で「アンノン族」という流行語を生んだ『anan』（1970年創刊、模倣誌に集英社『non-no』）、或いは“Magazine for City Boys”を謳いカタログ文化の享受者としての「ポパイ少年」を生んだものとして注目された『POPEYE』（1976年創刊、模倣誌に講談社『HotDog-PRESS』）などは、代表的なものである。『平凡』は「見る雑誌」として視覚的要素に訴える初の大衆雑誌であった。創刊から商業デザイナー大橋正を起用した『平凡』以降、平凡出版は視覚的経験を重視した編集を行い、『週刊平凡』以降堀内誠一を起用していく。こうした戦後大衆雑誌の原点として『平凡』を位置づけることが出来よう。

更に筆者が注目するのは、平凡出版が開拓してきた雑誌読者層の質である。戦後若者文化史に対する従来の社会学的研究における1960-70年代の記述は大学生に代表される〈モラトリアムの担い手〉の文化の連続性のみを強調する偏ったものがなされていた。しかし筆者が既に別稿で論じたように1960年代の若者においては勤労青少年が大多数であり、1960年代の〈勤労青少年〉〈モラトリアムの担い手〉から70年代の〈モラトリアムの担い手〉へ、という2元から1元への移行が起きたのである。したがって若者文化史を論じる際にも、従来の1元的な流れだけではなく2元から1元へという流れを踏まえた上で論じるべきである⁷。このことを念頭に置くとき、平凡出版の雑誌創刊の流れはこの移行と重なっていることに気づく。すなわち、主に勤労青少年を対象とした『平凡』・若い男性を対象としたはじめての週刊誌である『平凡パンチ』・そして『anan』『POPEYE』への流れは、先に見た2元から1元への移行にほぼ沿ったものであると言える。

以上の点において平凡出版の雑誌は昭和戦後期の大衆文化とくに若者文化を考える上で有効であり⁸、本稿で扱う時期の『平凡』はその原点に位置する。この時期の『平凡』の受容形態を検討する意義には以下に見る通時的意義と共時的意義の2つの意義がある。

第1に通時的意義について述べたい。戦後日本の文化と社会意識を雑誌を軸にして明らかにする試みが様々な研究者によって進められているが、1950-55年における『平凡』の受容経験を明らかにし上述した諸大衆雑誌を軸とする戦後大衆文化の展開に位置づけることは、大衆雑誌を軸に戦後日本の文化と社会意識の研究を進めていく上で不可欠である。

⁷ 拙稿「戦後日本における『勤労青年』文化——若い根つこの会会員手記に見る人生観の変容——」『京都社会学年報』第8号2000年、98-103頁。

⁸ 「平凡出版」時代においては、マンガ雑誌は創刊されていない。また、「マガジンハウス」以降、『パンチザウルス』（1989年）『コミックアレ!』（1994年）が創刊されているがいずれも短命に終わっている。にもかかわらず平凡出版の雑誌を戦後大衆文化・若者文化を考える際の主軸に据えるのはなぜか。井上俊は「現代文化を大きな枠でとらえようとするなら、少なくとも都市、消費、情報という三つの要因に注目する必要がある」「さらに、これらの要因との関連で、いわゆる『国際化』あるいは『グローバル化』という特徴をつけ加えてもよいだろう」と言う（井上「現代文化のとらえ方——都市・消費・情報——」井上編『新版 現代文化を学ぶ人のために』社会思想社1998年、2頁）。この3つ或いは4つの要因を鑑みると、平凡出版の雑誌の流れにはこれらの要因が揃っている。したがって、この流れを捉えることは、戦後大衆文化・若者文化を把握する上で極めて有効であると言える。

第2に共時的意義について述べたい。この当時の『平凡』は、『主婦の友』『ロマンス』⁹『ラッキー』¹⁰等の既存の大衆雑誌に影響を与えるとともに、『東京』『明星』等の新たな模倣誌を生んだ。これらのことから『平凡』が当時の大衆雑誌の中心的存在であったと言える。『平凡』の受容経験を明らかにすることは、当時の人びとがどのような経験を大衆雑誌の受容から得ていたかを明らかにすることにつながると言えよう。

1-2 『平凡』の沿革及び問題設定

1945年10月岩堀喜之助を代表とし清水達夫を編集長とする5人が合資会社凡人社（1954年より平凡出版株式会社、1983年より株式会社マガジンハウス）を創立した。岩堀が『陸軍画報』発行人中山正男から用紙権を¹¹、平凡社創業者下中弥三郎から『平凡』の登録権を譲り受け、同年11月創刊号が発行された。創刊号は、A5版の「中途半端な」（清水¹²）娯楽読み物雑誌であった。用紙事情から1947年末まで『平凡』は毎号発行されたわけではなく、17冊（1巻1号、2巻1-8号、3巻1-7号、4巻1号）刊行されている。この当時の『平凡』は文芸娯楽誌であったが、グラビアが存在していたこと及び読み物における企画にのちの『平凡』への連続性を見出すことが出来る¹³。

読み物における企画に関しては、次章において詳細に検討する、「歌と映画」を2本の柱とし（流行歌を媒介する）ラジオと映画という2つのメディアと結びつくのちの『平凡』への連続性を見出すことが出来る。それは、ラジオや映画を扱った企画や「お宅訪問」のような企画においてである¹⁴。

⁹ 1946年に創刊された『ロマンス』は、本稿で検討している時期以前最も影響力を持った大衆娯楽誌である。『ロマンス』については、塩澤実信『創刊号に賭けた編集者 戦後出版文化史[下]』論創社、1987年、ほかを参照。

¹⁰ 『ラッキー』については拙稿（「『平凡』読者の連帯と戦後大衆文化」『マス・コミュニケーション研究』60号、2002年、掲載予定）注16を参照。

¹¹ 休刊に至るまで第3種郵便物認可の日付が「昭和8年4月11日」となっているのは、『陸軍画報』時代の認可が継続していたからであるという。この認可は『陸軍画報』の前身であり1933年4月に創刊された『陸軍』（陸軍発行所）が取得したものである。1934年1月に発行権が平凡社に移り『陸軍画報』と改題された。このあと1935年4月に発行権が陸軍畫報社に移され1945年9月に休刊し、その権利が凡人社に移ったのである。このことは浜崎廣氏からの御教示による（2001年3月16日）。

¹² 無署名「十代の人気もの雑誌『平凡』をハダカにする」『週刊サンケイ』1954年9月12日号、4頁。

¹³ グラビアに関しては1947年3巻6号より巻頭にモノクログラビアが登場している。これは4頁であったが、同年発行の3巻7号・4巻1号においては8頁となっている。内容は、例えば3巻7号においては芸能界カップル3頁・映画紹介4頁・広告（コロムビアレコード）1頁となっている。ただし、これらのグラビアを同時期の『キング』『主婦の友』と比較してもそれ程大きな差異は感じられない。したがって本稿の問題関心からいえば問題とするべきはやはり1950-55年のグラビアであり、この検討は2章2節に譲りたい。

¹⁴ 具体的には、サトウハチロー・並木路子・万城目正「リンゴの唄屋はなし」（1946年2巻4号）早乙女武「東宝撮影所訪問記」（同）特輯「話の泉屋話」（47年3巻4号）風上甲「ユーモア探訪記 のど自慢コンクール」（同年3巻5号）「花形訪問記」（46年2巻7号）サトウハチロー「流行歌今昔記」（47年3巻2号）「レヴュウ今昔記」（47年3巻5号）南部僑一郎「すたでいお風流記」布施たけ代「大下ホームラン王訪問記」（47年3巻4号）ぶち・えびきゅりあん「当代流行歌手評判記」（47年3巻5号）南部僑一郎・淀川長治「スタアロマンス 映画結婚行進曲」（47年3巻7号）などを挙げることが出来る。

そして1948年2月号より、流行歌と映画を編集の2本の柱に据えた大衆娯楽雑誌として、B5判化した。このリニューアルは読者の圧倒的な支持を得、1955年までの間大幅に部数を伸ばした。1948年2月号の発行部数は4万部であったが1953年1月号は「百万部突破記念特大号」として発行され、1955年6月号は140万部を発行した。とりわけ1950年代前半にはその躍進が社会現象として注目され様々なメディアによって取り上げられた¹⁵。この時期が、第1の躍進期である。その後部数は100万部を切っていたが1970年代前半には再び部数が躍進し1974年2月号には創刊以来最高の部数である153万部を発行した。これが第2の躍進期であり、この間の1973年9月号にはAB判に改められた。このあと1987年12月号をもって休刊した。

『平凡』をめぐる従来の論考においてはこの1950-55年に重点が置かれていた。その系譜においては鶴見俊輔らによって1953年京都大学人文科学研究所で行われた「平凡を読む会」¹⁶、そこでのコメントをまとめた鶴見「見る雑誌の登場」をまず挙げることが出来る¹⁷。これは『平凡』の「見る雑誌」としての斬新さに着眼したものであり、『平凡』に対する知識人の評価が低かった時代に『平凡』に積極的な意義を見出した先駆的な業績である。この「見る雑誌」論を引き継いだ論者に江藤文夫がいる。江藤は『平凡』から『週刊平凡』『平凡パンチ』への流れを「見る雑誌」から「(雑誌に書かれた情報をもとに生活を)する雑誌」への流れと位置づけた。また、江藤は第1の躍進期に戦後大衆文化におけるさまざまな企画の原型があることを指摘している¹⁸。江藤のこの指摘に依拠しこれらの「見る雑誌」論においては捨象されていた読者の姿を検討し当時の読者層の核に連帯意識が存在していたことを明らかにするとともにその重要性を指摘した論考として、筆者によるものがある¹⁹。これ以外の論者としては原喜美・吉澤夏子がいる²⁰。

本稿で検討する時期における『平凡』の読者間での相対的位置の高さは、『平凡』を通したどのような経験と結びついていたのであろうか。『平凡』においては多岐に渡るテーマが扱われている。たとえば清水は1952年当時編集の狙いを“7S”としている。その7Sとは、映画・舞台・歌謡曲・性・スポーツ・スタイル・物語であるという²¹。だがその中で最も重要であると言えるのが、“歌と映画

¹⁵ たとえば、田中勇「岩堀喜之助という男 一〇〇万雑誌『平凡』の秘密」『週刊朝日』1954年9月5日号。

¹⁶ 「平凡族を分析する」『学園新聞』1953年6月1日号。

¹⁷ 鶴見俊輔「見る雑誌の登場」『大衆芸術』河出書房、1954年（のちに『限界芸術論』勁草書房、1967年、に収録）。

¹⁸ 江藤文夫『見る雑誌する雑誌 平凡文化の発見性と創造性』平凡出版、1966年。

¹⁹ 拙稿「『平凡』読者の連帯と戦後大衆文化」

²⁰ 原喜美「青少年向け娯楽雑誌『平凡』にあらわれた価値指向」『国際基督教大学学報Ⅰ-A 教育学研究』7-1960年、吉澤夏子「性のダブル・スタンダードをめぐる葛藤 『平凡』における〈若者〉のセクシュアリティ」青木・川本・筒井・御厨・山折編『近代日本文化論8 女の文化』岩波書店、2000年。

²¹ 岩堀喜之助・八木沢文雄・窪田幸茂・清水達夫「座談会 働く人々の家庭雑誌『平凡』」『新刊ニュース』1952年2月1日号、5頁。

の娯楽雑誌”というコピーに象徴されるように編集の柱となった“歌と映画”である。したがって以下この2つとの結びつきに焦点を絞り検討していきたい。

2 誌面の構成とその受容経験

2-1 第一の躍進期における誌面の内容とその受容経験

それでは、第1の躍進期である1950-55年における誌面の内容はどのようなものであったのだろうか。そしてその受容はどのような文化的経験だったのであろうか。1948年2月号のリニューアル以降同年5月号からサブタイトルとしてつけられた“歌と映画の娯楽雑誌”というコピーに象徴されるように、『平凡』は流行歌と映画を2本の柱としていた。したがって、たとえば「まだテレビが普及していないとき、映画とのつながりによって立体的な編集をし、大衆の心理を巧みに把握したことが、この雑誌の成功の最大の原因であった」²²という理解だけでは一面的であると言えよう。冒頭に述べた問題を考えるにあたっては、(流行歌を媒介する)ラジオと映画の両方を考えなければならない。以下、ラジオと映画という2つのメディアとの結びつきに着目して議論を進める。

まず、図4を見てみたい。これは「百万部突破記念特大号」と題された1953年1月号の目次である。この目次は見開き2頁のものであるが、右頁の中央には連載小説5本と他の小説3本が記載されている。一方左頁中央部にはグラビアのタイトルが記載されている。その左隣には映画のストーリーを紹介する2本の読み物が記載されている。そして小説・グラビア・映画物語のタイトルが記載された上下には座談会等の様々な読み物のタイトルが記載されている。これらのこと、とくに小説とグラビアがそれぞれの頁の中心に記載されていることから我々が考えることができるのは、この当時の『平凡』においてはグラビアと小説は同じくらいの重要性を帯びたものではなかったのか、ということである²³。例えば次の投書を見てみたい。

「僕は太平洋戦争で左足大腿部より切断左足右手背中にもまだ弾片を二十数個入れている元海軍傷痍軍人ですが日夜家業にはげみつつ『平凡』昨年六月号からの大ファンです。毎月同じところを二度も

²² 山田實「講和条約発効前後とマス・メディア」山本文雄編著『日本マス・コミュニケーション史 【増補】』東海大学出版会、1970年、279頁。

²³ 戦前の代表的な大衆雑誌である『キング』『主婦之友』においてグラビアは質量ともに従属的な扱いでしかない。まず「質」においては、この時期の『平凡』はグラビアのレイアウトに商業デザイナー大橋正を起用し視覚に訴えるものであったのに対し、上記の雑誌において(グラビアだけではなく誌面全体の)レイアウトは凝ったものにはなっていない。次に「量」においては、戦前の『キング』『主婦之友』においては雑誌全体の殆どが本文に用いられており、グラビアは従属的な扱いでしかない。たとえば『キング』の場合1冊が5~600頁以上ある場合でもグラビアに割かれているのは1割弱である。

三度も読んで次号を待っています。『友の会』の皆様お便り下さい。一日千秋の思いで待ちます」²⁴。

図4 『平凡』1953年1月号目次



資料提供：株式会社マガジンハウス

この投書においては「読んで」という表現が使われており「見ては」という表現が用いられているのではない。同様の表現を用いた投書は他にも見ることが出来る。すなわち「見る雑誌」という把握だけではこぼれ落ちる経験があるのではないだろうか。また誌面すべてを小稿で検討するのは不可能である。そのため、本章では誌面の軸となった小説とグラビアの双方に渡って誌面の検討を行う。その際以下の2点を念頭に置き検討を進めていきたい。それは第1に、先述したようにあくまでもラジオと映画との結びつきに着目することである。第2に、序章でも触れたように、あくまでも第1の躍進期である1950-55年における読者の経験を明らかにすることに目的を絞るということである。

あとに見るようにこの時期『平凡』は回覧によって発行部数の何倍もの人びとの目に触れていた。そこにはおそらく何百万通り或いはそれ以上の「読む」という行為があったはずであり、その全てを再構成することは不可能である。したがって本章においては読者のどのような形の受容に向けて『平凡』にグラビアと小説が掲載されそれぞれがどのようにラジオと映画に結びついていたのかに着眼する。すなわち、「書かれたものを書物として読む行為を組織する技術的・視覚的・物質的装置」²⁵にな

²⁴ 「平凡友の会」『平凡』1950年7月号、129頁。

²⁵ シャルチエ（長谷川輝夫訳）『書物の秩序』筑摩書房、1996年、11頁。

るべく配慮し、無数の読みの核となるものを探求するのである。それとともに読者投稿欄・関係者へのインタビューから得たデータをも用いる。

2-2 グラビアの受容経験

まずグラビアについて見ていきたい。グラビアの種類は、スタアの私生活や仕事の風景を見せるもの・スタアの家庭訪問・ラジオ番組や映画の撮影現場の紹介・スタアの対談風景・芸能ニュースをはじめとして多岐に渡っている。たとえば、1948年8月号グラビア頁には茅ヶ崎海岸の上原謙夫妻が掲載されている。これは「スターの家庭訪問」特写の第1回目であった。1950年4月号では3頁に渡って満12歳を迎える美空ひばりの新居を紹介し、「美空ひばりちゃんの朝から夜まで」と題し全家族と彼女の一日のスナップ写真を掲載している。1952年11月号では「NHK ラジオ特別番組・映画スタア 紅白『二十の扉』を誌上テレビ放送としてグラビアで紹介している。そのリード文には「ああ 顔が見たいな…ラジオを聞きながら溜息をつかれる皆さん！さあこれから『平凡』がお送りする誌上テレビ放送をお楽しみください」と記されている。このように、グラビアは普段まず目にすることの出来ないスタアのいきいきとした姿を見たいという人びとの欲望に応えようとしたものであると言える。これらとは別にグラビアのためにロケ等を行いそこで撮影をした写真を掲載した企画も多く見ることが出来る。これらも、この欲望に応えようとしたものであろう。たとえば1953年5月号では、グラビア4頁で「春はバスに乗って」と題し映画スタア・歌手30名を配役して行った東京新名所観光バスめぐりの様子が掲載されている。これは特に地方の読者を意識していると思われる。またグラビアと直接記事が結びついたものも多く見られる。例えば、1948年3月号から対談はグラビア頁に写真を載せ本文にその内容を続けるようになった。同年6月号からは「希望対談」が掲載され、この号は高峰三枝子・藤山一郎の対談が掲載されているが、グラビア最終頁から対談が始まり本文巻頭に続く『平凡』独自のスタイルが出来上がった。またこの号は歌謡曲特集号でオフセットから・グラビア・本文と全てが歌謡曲ブームに合わせられている。

1955年に入社し第2の躍進期に編集長を勤めた高木清氏によると『平凡』のグラビアを代表するものを次の4つに分けることが出来るという。それは第1に、スタアの新居訪問である。第2に、現代劇のスタアに時代劇の格好をさせた企画や所属会社が違うスタア同士の顔合わせの企画など、映画では見ることの出来ないものである。第3に、映画のロケーション先にカメラマンが付いていったりローカルカラーのある曲がヒットしたときにその歌手をその土地に連れて行ったりしておこなう名所旧跡の紹介である。第4に出産や結婚などである²⁶。

このようなグラビアを通した経験はどのようなものであったのだろうか。先に美空ひばりのグラビ

²⁶ 2001年10月7日。

アの例を見たが、鶴見は『平凡』『明星』を通した経験を次のように言う。「ファン雑誌は、その読者たちの、スターと直接に友達づきあいしているかのような幻想を与える。魚屋出身ということが、彼女（注、美空ひばり）に独特の親近感を、大衆に抱かせた」²⁷。たとえば作家の阿奈井文彦は、『平凡』を通した自身の経験を次のように語っている。「美空ひばりが、魚屋『魚増』の長女で、妹に勢津子、弟に益夫、武彦がいて、初舞台は美空和枝の芸名で、九歳のとき、横浜宝塚の名人会に。好きな食べ物は、スキヤキ——といったくらいのことは、九州の山村に住む小学生の私でも知悉していた」²⁸。このように、従来は神格化されていたスタアの人間としての姿をグラビア・記事は多くの人びとに伝えたと言ってもよい。辻道宣氏（マガジンハウス資料管理部）によると、都市の映画館や地方の巡回映画のスクリーンでしか見ることの出来なかったスタアがグラビアの中で読者に向かってにっこりと笑っているところに、読者は親近感を抱いたのだという。そのためスチールやプロマイドを用いず、苦勞をして撮影をしたのだという²⁹。江藤は「スターに関して、平凡のおこなったもっとも大きな仕事は、スターとファンとのあいだにも、上下でない、ヨコの関係をきずいていったことである」³⁰と言う。そして次のように述べている。

「スターはファンにとって、仰ぎ見る存在であった。スターはファンの“彼岸”にいた。スターはスクリーンのなかに住む架空のイメージであった。『平凡』はそのスターを、ファンにとって身近な存在にした。ファンがスターに接する機会を、誌上で、また家庭訪問や撮影所見学によって、作っていた。スター対談や家庭訪問は、スターの素顔や実生活を、ファンの前に見せるものであった。こうしてスターは、架空の世界にのみ生きる“別人種”ではなくなっていった」³¹。

以上からグラビアはラジオ・映画の両メディアとつながっていたといえよう。だが、映画・ラジオのどちらにより直接的につながっていたのかといえば、次に見る、グラビアに流行歌の歌詞を掲載したことから判断することが出来るように、ラジオではないだろうか。

B5 判化とともにグラビアに起きた画期的な変化として歌謡曲の歌詞が掲載されたことを挙げる事が出来る。高木氏によるとそれまでの人びとはラジオから流れる流行歌を聴くのみでその正確な歌詞を知らなかった。歌詞を知りたいときには、ラジオで歌を聴きながら手で紙に自分が聴き取った歌

²⁷ 鶴見俊輔『日本の百年1 新しい開国』筑摩書房 1961年、233頁。

²⁸ 阿奈井文彦「本と歩く5 雑誌『平凡』の戦後」『諸君！』1996年10月号、238頁。

²⁹ 2001年10月10日。なお、1951年の全国の映画場は、常設のもの4366、仮設のもの31865であり、仮設のものが圧倒的に多い（自治庁税務部調べ、『1954年版 朝日年鑑』463頁）。

³⁰ 江藤文夫『スター そのイメージと本人の間』毎日新聞社、1968年、84頁。

³¹ 同書、85頁。

詞を書くしかなかった³²。たとえば「NHKの『ラジオ歌謡』では、歌詞書きとりのための時間をわざわざもうけて、ゆっくりと何度もくりかえして歌詞を読みあげるサービスをしていた」³³。つまり歌を聴くだけでなく同時に歌手の顔を見、且つ印刷された歌詞をも見ることが出来るという経験は、『平凡』によって可能になった経験であった。1948年2月号の巻頭グラビア「コロムビア・ヒットソング集」では映画スチールと歌手のポートレートが組み合わせられ歌詞が掲載された。1953年7月号より、フロント・ページをヒットソング名場面とし歌手の写真と絵のバックを合成した。これ以外の形ででも歌詞は掲載されていた。また、『主婦の友』『ロマンス』『ラッキー』においても『平凡』躍進以降グラビアに流行歌の歌詞が掲載されるようになっていく³⁴。ところで『平凡』グラビアに掲載された歌詞から読者は流行歌の正確な歌詞を知るのみにとどまっていたのであろうか。例えば以下の投書を見ると、グラビアで知った歌詞を実際に歌っていたことを窺うことが出来る。

「平凡片手に大好きな歌謡曲をうたってたのしんでいます。“歌は世につれ、世は歌につれ”われわれ若人にとって歌が無かったら、こんなつまらない世の中はないと確信しています。歌、歌、さア、友の会の皆様、明るく唄ってきましょう」³⁵。

この歌詞掲載は2つの形に進化している。その1つは歌本であり、もう1つは「平凡アワー」である。

1949年1月号にはじめて附録に付けられた歌本は持ち運びに便利なサイズのもので、スタアの写真正とともに流行歌の歌詞が掲載されていただけでなく、楽譜も掲載されていた。この歌本の受容のあり方として、たとえば鹿島茂は1957年の回想として実家の酒屋にいた女店員がラジオで紅白歌合戦を聴きながら歌本と一緒に歌うことを楽しみにしていたことを述べている³⁶。また、楽譜が掲載されていることから、楽器を誰かが弾きそのまわりで人びとが歌を歌うことが、大衆的に可能になった。以下に見る投書においては楽器が用いられていたのかどうかは不明であるが、歌本を用い大勢で歌を歌うという経験が綴られている。

「十月十九日、私の工場の労働組合主催の『三つの歌』がおこなわれました。トップを切って執行

³² 2000年8月18日。

³³ 『創造の四十年 マガジンハウスのあゆみ』マガジンハウス、1985年、75頁。

³⁴ 誌面全体の構成や誌面のレイアウトも『平凡』に似たものとなっている。また『主婦の友』は『婦人倶楽部』『婦人生活』『主婦と生活』とともに1956年A5判からB5判に移行した。

³⁵ 「友の会」『平凡』1951年3月号、195頁。

³⁶ 鹿島茂「『平凡』『週刊平凡』『平凡パンチ』」「この人からはじまる カップラーメンからキャバレーまで」小学館、2000年、81頁。

委員長が『炭坑節』をはりきって唄ったのには満場大笑いでした。あまり面白いので来賓席の工場長まで出てきて唄ったので、驚いてしまいました。いつも闘争だ、賃金値上要求だなどと、いかめしいことを云っている組合役員も、この日は皆ニコニコしていました。出場の順を待つ人も、見物している人も、皆平凡附録の『三つの歌』を一生懸命にのぞいています。私も『三つの歌』を二冊、出演者に貸してやりましたが、そのおかげか、三つとも唄えたので、とても嬉しかったです³⁷。

グラビアとラジオのつながりにおいて画期的であったのは、1951年11月1日に始まった「平凡アワー」である。これは「雑誌のグラビアを耳ででき、編集の立体化を試み」た（清水³⁸）ものであった。たとえば番組開始直後の11月4日に、先に見た「希望対談」の企画で灰田勝彦が東京・パリの国際電話を通してパリに住む高峰秀子呼びだし彼女の近況を聞いた。この録音は15日に放送され、22日発売の1952年1月号にグラビアとともに掲載された。

1952年8月号からはグラビア歌ページと「平凡アワー」の立体編集が行われた。ここでは「歌のプレゼント お好み歌謡曲」と題した頁に流行歌の歌詞が歌手のポートレートやその歌を主題歌としている映画のスチール写真とともに掲載され、その頁と対応する番組の放送日時が記載されている。それまでは直接『平凡』とは関わりのないラジオ番組を聴きながらグラビアに掲載された歌詞に目を向けることしかできなかったが、「平凡アワー」により、グラビアに掲載された歌詞とラジオ番組とが直接リンクしたのである。1956年以降「平凡アワー」の司会を務めた玉置宏は次のように述べている。

『「平凡アワー」というのは、『月刊平凡』とラジオによる音との立体編集という、まったく新しい試みですね。『ただいま発売中の『平凡』の何ページをお開きください。誰々と誰々がにこやかに誌面でほほえんでおります。では、お二人の対談をラジオを通してお聴きください』というのが企画の中心。番組の中で流す曲にしても、コロムビアと提携していて、『何ページの歌詞を見ながら、ご一緒にお歌いください』と。そのページを開くと、そこが今の歌本のようになっているんですね³⁹。

そして先に見たように「平凡アワー」においては単に流行歌が流されただけではなかった。1954年11月号には平凡アワーで放送する立体グラビア「ウェディング・ベルが盗まれた」が掲載されている。これは江利チエミ・雪村いづみ・石浜朗・有島一郎らが出演するラジオドラマに対応したもので、登場人物の姿に扮したスタアの姿の写真がセリフとともに掲載されている。また放送日時も記載され

³⁷ 「友の会」『平凡』1953年1月号、166-7頁。

³⁸ 清水達夫「編集面から見た社史」『読者とともに20年 平凡出版株式会社小史』平凡出版、1965年、34頁。

³⁹ 玉置宏・千秋与四夫・上野修・高橋基子「座談会 エピソードがいっぱい！話題を集めた平凡の放送番組誕生秘話」『トーキングマガジン人間 平凡出版株式会社35周年小史』平凡出版、1980年、31頁。

ている。1955年1月号の第83回「希望対談」には春日八郎・青木光一・三浦洸一の「平凡アワーで放送する立体対談」が掲載されている。これは既に放送済みのものであるが、銭湯での3人の姿が3人のヒット曲の歌詞とともに掲載されている。「希望対談」のグラビアにおいてはグラビア最終頁から本文巻頭へ続くスタイルがなされたことを先述したが、これもそうした構成になっている。

周知のように、テレビ普及以前におけるラジオの聴取スタイルは、家族で1台のラジオを囲み耳を澄ますのが一般的であった。これを考えると、家族でラジオを囲み『平凡』のグラビアを見ながらスタアの会話を聴いたり歌詞を見て歌を歌っていたと考えることが出来る。また誌面に掲載された対談が既に放送されている場合でも、その放送を聴取者は家族揃って聴いている可能性が高い。既に放送されたスタアの声や対談の内容を思い浮かべながら家族で頁をめくっていたのではないだろうか。

本章ではグラビアと小説を別個に検討しているが、両者が相互に関わり合い更には映画・ラジオともリンクしているものも見られる。たとえば、1952年11月号には「ようこそ！オブライエンちゃん」と題したモノクログラビアが7頁に渡って掲載されている。これは、美空ひばりと映画で共演するアメリカの子役マーガレット・オブライエンが撮影のため来日したときの様子を紹介したものである。グラビアのうち2頁にはひばりとの対談が掲載されている。そしてその内容の一部が既に「平凡アワー」で放送されたことがグラビアに記載されている。また120-130頁において出演映画の原作小国秀雄「二人の瞳」が掲載されている。グラビア・小説・映画・ラジオのこのようなより複雑な連関も見られる。

以上『平凡』におけるグラビアとラジオの連動を検討したが、視覚的要素と聴覚的要素が、テレビ普及以前の大衆雑誌において組み合わせられていた。これはテレビ普及以前にスタアの動く姿を見ると同時にその声を聴こうとした試みであったと言えるが、実際にテレビの登場以降、『平凡』はテレビともタイアップし、3本の番組を放映することになる。まず1957年1月より⁴⁰日本テレビで「ワイドショーのはしり」（中丸巖・マガジンハウス資料管理部部長⁴¹）と言える『平凡芸能ニュース』（15分間）が放映された。次に、1961年2月からフジテレビで『平凡歌のバースデー・ショー』（30分間）が放映された。これは、毎週、その週が誕生日に当たる芸能人とそのゲストの芸能人を招き持ち歌の交換をするもので、ライバルの歌を歌うということは当時考えられず、人気番組であった。担当ディレクターだった千秋与四夫によるとフジテレビで最初に視聴率30%を越えた番組であり、音楽バラエティ番組としてもはじめて30%を越えた番組であるという⁴²。最後に、1961年12月より翌年5月まで日本テレビで『平凡歌のベナントレース』（30分間）というのど自慢番組が放映された。本節で

⁴⁰ 『読者とともに20年 平凡出版株式会社小史』平凡出版1965年では1956年11月からということになっている（137頁）が、中丸巖・マガジンハウス資料管理部部長によると、これは誤りであるという（2000年7月24日）。

⁴¹ 2000年7月24日。

⁴² 玉置・千秋・上野・高橋、前掲座談会、31-2頁。

検討したグラビアとラジオの連動の最終的な形態がこれらのテレビ放映だと言えるのではないか。

2-3 小説の受容経験

次に小説について見ていきたい。リニューアルした頃の『平凡』が部数を伸ばしたきっかけに、1949年3月号から連載された小糸のぶ「乙女の性典」を上げることが出来る⁴³。これは、1948年5月号から連載された子母澤寛「お役者小僧」とともに二大連載小説として部数の伸張に好影響を与え、1949年9月号は10万部が発行された。

これ以降連載小説は映画化を目的として企画され、またその主題歌は必ずレコード化された⁴⁴。たとえば、1954年7月号から連載された中野実「ジャンケン娘」は美空ひばり・江利チエミ・雪村いづみの「三人娘」の初共演作品として東宝から映画化された。1955年12月号ではその封切りを伝えるグラビアに3人が登場している。これにはモノクログラビア3頁に撮影風景等の写真が掲載されるとともに映画のなかで3人が歌う4曲の歌詞が掲載されている。そしてこれらの歌が「平凡アワー」で流される予定であることも記されている。小説が映画とリンクするだけでなくグラビア・ラジオともリンクしているのである。

こうした小説に対し読者はどのように接していたのか。毎号小説が掲載されたあと読者からの声を紹介している場合があるので、その代表的なものを以下に挙げるが、これらから我々は次の2つの意識を読みとることが出来る。それは第1に小説に現在の我々からは過剰ともとれる思い入れをもち連載小説を日々の支えとする意識である⁴⁵。第2には、映画を支えにするとともに、自分たちの映画を自分たちで作り支えていこうという意識である。

「志津子さんが幸福に暮らす日までは、どんなに悲しく苦しい日がつづくことでしょう。志津子さんが早く幸福になりますように次号を楽しみに待っています」⁴⁶。

「中野実先生のジャンケン娘は、とても面白く、家中みんなで大喜びで読みます。この小説は、映画にはならないのでしょうか。それからジャンケン娘三人を読者から募集したらいかがでしょうか」⁴⁷。

⁴³ 「乙女の性典」の連載のいきさつについては、清水達夫『二人で一人の物語 マガジンハウスの雑誌づくり』出版ニュース社、1985年、143-8頁、小糸のぶ『わが歳月』ふらんす堂、1994年、75-8頁、ほかを参照。

⁴⁴ 清水、前掲書、135頁。

⁴⁵ この意識については、近現代の人びとの意識における新聞・雑誌の連載小説の位置付けの変遷をも踏まえ今後検討していく必要があるであろう。

⁴⁶ 『平凡』1954年4月号123頁、「哀愁日記」に寄せられた投書。

⁴⁷ 『平凡』1954年10月号、221頁。

「村上元三先生の『八洲遊侠伝』は、平凡を受け取りますと、まっ先に読みます。毎月が待ち遠しく、親類の者にもお見せして大評判です。——お町と源太郎はどうなるのでしょうか？」⁴⁸。

「富田先生の姿三四郎は僕の飯より大好きな小説です。次号が待ち遠しくてなりません。大映で映画化されるときは、ぜひ菅原謙二さんと若尾文子さんのコンビでねがいます」⁴⁹。

最後の投書が掲載された号に掲載されている別の連載小説のうしろには次のような編集部のコメントが記載されている。

「(略) ほか、多くの皆様から、映画化のご希望がたくさん寄せられています。先月号でもおしらせいたしましたように、松竹で中村賀津雄さんと野添ひとみさんに、東映で東千代之介さんと田代百合子さんに、大映で、市川雷蔵さんと若尾文子さんというふうに、皆さんそれぞれご希望が違います。江戸に着いた安兵衛の活躍はいよいよこれからで、連載は一カ年つづきます。山手先生もこの映画がよいのか大へんお困りのようですからもう少しお待ちになってください」⁵⁰。

我々は、これらに、映画化に自身の声を反映させようという読者達の姿を読みとることが出来るであろう。また小説の作者の住所が毎号小説のあとに掲載されていることから作家のもとへもこうした手紙が寄せられたことは想像に難くない。作家の住所だけではなく1948年3月号では巻末に「映画俳優住所録」が掲載され同年6月号歌謡曲特集号では巻末に「流行歌手住所録」が掲載された。このあと毎号グラビア・記事にスタアの住所が掲載されただけではなくスタア住所録が度々誌上付録または別冊付録として作られた。住所掲載は読者にとっては作家やスタアと実際につながっていくためのものであったと言えよう。

また、この時期小説のタイトルや配役の投票などが盛んに行われた⁵¹ほか、多くの読者参加企画が行われた。たとえば、1948年3月号には「東宝撮影所へ愛読者招待」の募集記事が掲載されている。

⁴⁸ 『平凡』1955年5月号、197頁。

⁴⁹ 『平凡』1955年12月号、203頁。

⁵⁰ 『平凡』1955年12月号、304頁。

⁵¹ 1950年7月号から連載が始まった斎藤良輔「女性三重奏」においては松竹・コロムビアとタイアップし「ミス女性三重奏」を募集した。「ミス女性三重奏」応募者は7千余名にのぼり、平凡・松竹・コロムビア三社の審査員により、コロムビア・スタジオで審査が行われた。1952年9月号では小説題名が読者より懸賞募集され、松竹とタイアップし全国女性から募集した女性の声を集めてストーリーとした新連載小説（小糸のぶ執筆）が始まった。懸賞募集の結果は、当初の仮題「女性の声」に決まった。1953年2月号では美空ひばりの新しい映画の役柄について読者企画募集が行われた。1953年10月号では「ミス・ミスター十代」募集が行われ、翌年4月平凡選出のミス十代岩熊美弥子が新東宝「ママの新婚旅行」でデビューした。

これは読者組織「友の会」の月例撮影所見学へと発展した。1950年5月号ではビクターとタイアップして「高峰秀子の唄う歌」懸賞募集が行われ、この作詞募集は後年まで続いた。1951年10月号では映画会社とのタイアップのもと「ミス平凡・ミスター平凡」が募集された。またコロムビアと提携した「第1回全国歌謡コンクール」が始められた。これらも実際にスタアの世界に読者がかかわっていくものであり、これだけの参加企画がなされえた背景には、映画を支えとしつながっていかうとする先に見た心性と同様のものがあつたのではないか。「歌と映画」につながっていかうとする、人びとの意識を、これらから我々は見出すことができよう。

更に小説は映画だけではなくラジオともリンクしていった。1954年8月号から「ラジオで放送する日本で初めての立体絵物語」と銘打たれ中村錦之介と美空ひばりの2大スタアが共演した「明玉夕玉」が連載された⁵²。これをかわきりに「ラジオで放送する立体絵物語」が掲載された。そして1955年には3本の小説が「ラジオで放送する立体絵物語」として掲載されていた。これらはそれぞれの場面ごとの挿し絵が掲載され、中にはラジオで声を演じているスタアが登場人物の格好をして何らかの動作を行っている写真が掲載されることもあつた。またそのラジオドラマの主題歌も掲載されていることが多く、読者はラジオを囲み『平凡』誌面に目を向けて番組を聴取していたと思われる。このような形式は、ひとりが音読し周囲がそれに耳を傾けるという、音読を伴った共同体的読書形態と同様のものと考えることが出来る。なぜなら、音読をする者の声が電波に乗り視覚的要素が加わっただけであると考えられるからである。その点では先の「平凡アワー」の例と同様であると言えよう⁵³。ラジオで放送されたものの中には1955年7月号から連載された北条誠「ただひとりの人」のように映画化されたものもあり、小説・ラジオ・レコード・映画が連動したより複雑な形態のものも見られた。

以上グラビアと小説を通して、「見る」「読む」というだけではない家族ぐるみの共同体的な受容のありかたを検討した。この受容は、同時に「(ラジオを)聴く」「歌う」「(読者参加企画に)参加する」という共振性を伴うものであつた。

2-4 このあとの誌面構成とその受容経験

以上本章においては『平凡』の1度目の躍進期である1950-55年の誌面とその受容経験を、グラビアと小説に分けて検討してきた。それでは、この時期以降、誌面の構成はどのようになり、それとともにその受容経験はどのようなものになるのであろうか。それを簡単に見ておきたい。

⁵² 「明玉夕玉」に関しては加藤安貞構成・編集『平凡特別編集 「あなたの美空ひばり」 十三回忌メモリアル 完全復刻版』マガジンハウス、2001年、222-3頁、も参照。

⁵³ 音読を伴った共同体的受容経験に視覚的要素が加わったメディアとして、紙芝居を挙げることが出来る。戦後における紙芝居のピークは1950年代前半でこの時期にはプロの紙芝居師が全国に5万人いた。このピークと『平凡』の躍進が重なるのも、その受容経験に共通したものがあったからではないか。

図5は第2の躍進期である1972年3月号の目次である。横書きの目次には上から「カラーページ」「グラフ」「2色ページ」が記載され、残された小さなスペースに「よみもの」が記載されている。目次のこの構成からも、この時期には連載小説がなくなるとともに誌面全体がグラビア優位になっていることが、理解できよう。そのグラビアにおいては、読者からの作詞募集の入選作がその作品を歌う歌手の写真とともに掲載されているものを除いては、歌詞は掲載されていない（歌本はこの時期にも付録として付けられている）。またラジオ「平凡アワー」の放送は続いているが、グラビアにおいては、「平凡アワー」の地方公開録音の様子が紹介されているくらいで、グラビアを見ながらラジオを囲んで番組を聴いたり或いは歌ったりという受容に対応したものではない。ここから、共振性を伴った共同体的受容の要素が薄くなっていることが理解できよう。更に15年後の、休刊間近の1987年3月号の目次が図6である。これは、グラビアがより誌面の中心になった構成になっている。

図5 『平凡』1972年3月号目次

THE 72 HERON MONTHLY 3 主眼目次	カラーページ 小堀ルミ子と南沙織の仲よしおしゃべり フォー・リーブスの寒ゲイコ 熱狂/ジュリー・オン・ステージ 岡崎友紀のお茶目なバス・ガール にしきのあきら/雪に立つ男 外国カラー・マーク坊やはベスト・ボウラー!? トレーシー・ハイド一家のマイ・ホーム 2つの愛について「初恋」と「別れの朝」
今月のホープ *札幌オリンピックを成功させよう! 郷 ひろみ (リレー3連覇) 「リレー3連覇」の快挙を遂げた郷ひろみ。その活躍の裏には、多くの苦闘と努力があった。その姿を、この雑誌を通じて、多くの人に紹介したい。郷ひろみの活躍の裏には、多くの苦闘と努力があった。その姿を、この雑誌を通じて、多くの人に紹介したい。	グラフ 男の魅力 学生スターの艶気風流 試験シーズンへハッスル! TVヤング・トリオの私生活 初公開/ゴールデン・ハーブの家族 追跡/天地真理の24時間 ピンクの発表会と芸者大募集 72年度古賀新人作曲賞募集……147
2色ページ ■本誌独占/希望対談No.34/フォー・リーブス対ゴールデン・ハーブ ライブ対決・TVのヤングプリンス仲 雅美/沖 雅也のすべて 初顔合わせ! どちらが世界一の美少年? ラブ・ランド ワイド特集/大ヒット前3人組 ■小堀ルミ子 ■南 沙織 ■天地真理 マーク・レスター映画名場面集	2大劇画 沖原ロードショー/別れの朝……秋明の巻 143 大好評! 新・人生相談新聞 いつわりの初恋……面・川辺アジオ 228 あなたの作るページ スターと読者のビッタン・コーナー 195 クローズ・アップ 志垣太郎スター・ストーリー 122
よみもの ■2大異色対談 3大特集 今月の特選ポップスと洋画コーナー……147 スターとSEX スターの告白する性愛……179 面接相談 198ヤング相談室……182 札幌オリンピック・オールガイド……211	沢田研二/尾崎紀世彦 107 森 進一/小倉 一郎 122 2大異色対談 3大特集 今月の特選ポップスと洋画コーナー……147 スターとSEX スターの告白する性愛……179 面接相談 198ヤング相談室……182 札幌オリンピック・オールガイド……211

資料提供：株式会社マガジンハウス

図6 『平凡』1987年3月号目次



資料提供：株式会社マガジンハウス

以上簡単に見たように、第2の躍進期以降の『平凡』誌面においては、連載小説の位置が失われている。またグラビア優位のものとなっている。そのグラビアは、共振性を伴った共同体的受容経験の要素が薄くなったものになっている。以上から、本章2、3節で検討した受容経験が、時間とともに薄れていったことが理解できよう。そして、第1の躍進期と第2の躍進期の相対的位置の差異は、この受容経験の差異に基づくのである。それでは、この共同体的受容を行っていた読者の姿は如何なるものであったのだろうか。

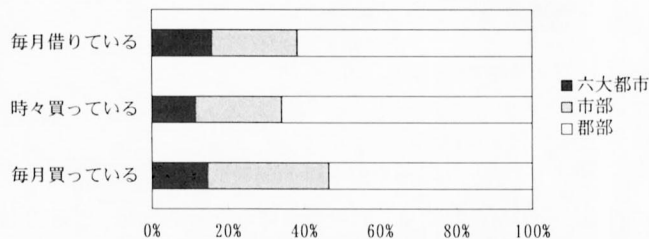
3 1950年代前半の読者像

3-1 読者層の検討

本稿で検討している時期の『平凡』読者層を1953年の読書世論調査のデータをもとに明らかにしたい。1953年を選んだのは、同年1月号が100万部を発行したからであり、躍進期の読者層を知るには適当だと思われたからである。まず男女比はほぼ半々である。図7は、読者層を地域別に見たもの

である。六大都市の読者は全体の1割強でこれと市部の読者の合計が4割前後である。そして読者の6割前後が郡部在住である。これらから、主に地方で購読されていることがわかる。1950年の国勢調査によると六大都市と市部を合わせた人口比率が37.5%で郡部のそれが62.5%である⁵⁴ことから、郡部在住の者が6割前後を占めるという『平凡』読者層は、当時の人口分布とほぼ重なっていたと言える。図8は読者の年齢層を見たものである。読者の年齢は16歳から20代が全体の約7割を占め、残りの約3割が30代以上である⁵⁵。読者の学歴を示したのが図9であるが、ここからは中卒者が大半であることがわかる。高等学校よりも更に高い教育を受けた読者は10%にも満たない。読者の職業を男女別に示したのが図10・11であるが、男子を示した図10からは読者の9割強が勤労者であることがわかる。それも社会の下積みになって働く人びとが大半である。女子を示したものが図11である。これは職業の有無のデータのみである。無職が7割以上であるが、階層的には男子と同様の階層に属していると思われる。また読書世論調査は周知のように16歳以上を対象にしている。それより若い年齢の人びとを対象にした「学校読書調査」がはじめて実施されたのは1955年である。ここでは、雑誌に関しては小学4-6年生及び中学生に調査がなされている。それによると『平凡』は中学3年生の女子の調査結果に現れているに過ぎない。

図7 1953年における『平凡』の読者層（地域別）

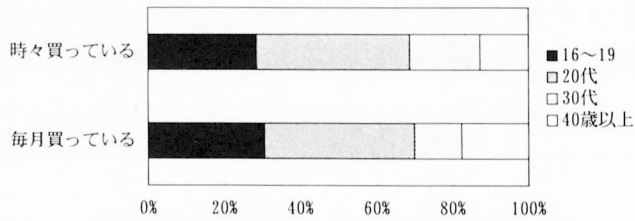


(出典：毎日新聞社編『第7回読書世論調査』毎日新聞社、1954年（復刻版、大空社、1997年）、63、74頁、をもとに作成）

⁵⁴ 総理府統計局編『昭和二十五年国勢調査報告(1)』印刷庁、1951年、34頁。なお、市部・郡部の年齢別人口構成比には殆ど差は見られない（同『昭和二十五年国勢調査報告(3)その1』印刷庁、1952年、96頁）。

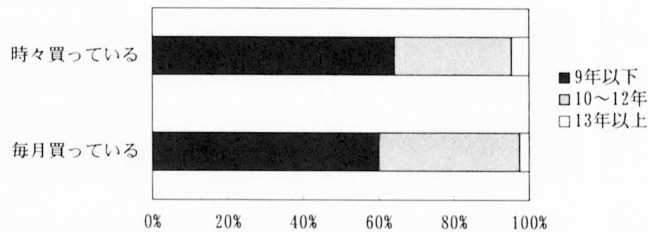
⁵⁵ 1953年の平均寿命は男61.9歳・女65.7歳である（厚生省大臣官房統計調査部編『第11回生命表』厚生統計協会、1966年、111頁）。1950年の国勢調査を再び繙けば、この年の年齢別人口構成比は、16歳から20代が24.9%で30代以上が37.6%である（『昭和二十五年国勢調査報告(2)』1952年、32頁、『昭和二十五年国勢調査報告(3)その1』、24頁、より算出）。

図8 1953年における『平凡』の読者層（年齢別）



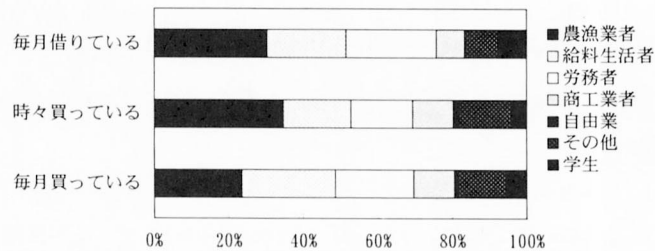
(出典：毎日新聞社編『第7回読書世論調査』毎日新聞社、1954年（復刻版、大空社、1997年）、66頁、をもとに作成)

図9 1953年における『平凡』の読者層（学歴別）



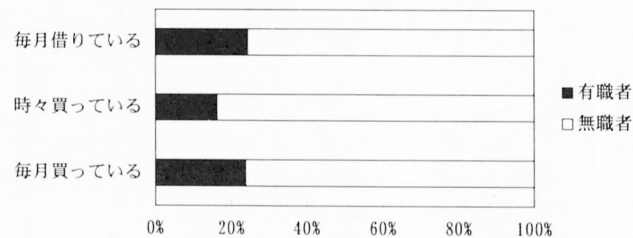
(出典：毎日新聞社編『第7回読書世論調査』毎日新聞社、1954年（復刻版、大空社、1997年）、69頁、をもとに作成)

図10 1953年における『平凡』の読者層（職業別・男）



(出典：毎日新聞社編『第7回読書世論調査』毎日新聞社、1954年（復刻版、大空社、1997年）、72、73、77頁、をもとに作成)

図11 1953年における『平凡』の読者層（職業別・女）



(出典：毎日新聞社編『第7回読書世論調査』毎日新聞社、1954年（復刻版、大空社、1997年）、72、73、77頁、をもとに作成)

3-2 読者の共同体的受容

前節で見たように、ジェンダー・年齢・趣味趣向などによって対象が細分化された現在の雑誌とは異なり、『平凡』は、ミーハー族と呼ばれた若年層を中心に、より上の年齢の人びとにも読まれていた。このことから、先に挙げた「平凡アワー」の受容と同様家族での受容を導き出すことができよう。実際、家族ぐるみで『平凡』を愛読している、という投書が多く掲載されている。

「私共は五人家族ですがいつも平凡を中心にたのしく暮しております。茶の間に平凡があれば一家が平和です。ニコニコ顔、笑い声、明るい話題にいつもにぎわっています」⁵⁶。

「ある夜平凡展覧会を一家そろって楽しく開きました。私のうちに平凡が十七冊たまりましたので一列に並べてどの表紙が一番好きか、家族全員で投票したところ、一等は七月号（津島さん登山姿）でした。全国の皆様、いかがですか。おたくでもぜひ一度展覧会を開いてごらん下さい」⁵⁷

それだけではない。先の『平凡アワー』及びラジオドラマの受容が音読による共同体的受容と共通した経験ではなかったのかということを指摘したが、実際に、誰かが音読をしそれを周囲が聞く、というスタイルの受容もなされていたようである⁵⁸。

「わが家で平凡の輪読会をはじめているこたつを囲みながら家中全部が順番をきめて凡ちゃんを読む。夕食後のひととき、この楽しい行事はほんとうに家庭を明るくしてくれる。おたがいにかくしきれない満足感に満たされている（略）」⁵⁹。

この「共同体的な受容」は、家族にとどまるものではなかった。原は、1960年の時点で「読書世論調査」のデータから「借りて読む雑誌としては、常に『平凡』が第一位である」⁶⁰ことを述べている。このように買って読む者よりも人に借りたり回覧により目にする者の方が多い。次に見るように『平凡』を職場や地域等で盛んに回覧している⁶¹という投書が多いことから、職場や地域のネットワーク

⁵⁶ 「友の会」『平凡』1951年6月号、184頁。

⁵⁷ 「友の会」『平凡』1951年10月号、184頁。

⁵⁸ 「夜部屋で静かに平凡を読むと、自然に私のいらだった心もやわらぎ、明日も元気で働こうと心に誓うのです」（「友の会」『平凡』1954年1月号、170頁）という投書に見られるように黙読による受容というスタイルも多く見受けられる。したがって音読による共同体的な受容を一般化するものではない。

⁵⁹ 「友の会」『平凡』1951年4月号、171頁。

⁶⁰ 原、前掲論文、247頁。

⁶¹ これは、「飢餓作戦」・「嵐揚げ作戦」と称し『平凡』の需要が高いにもかかわらずわざと供給を制限した岩堀によって「つくられた」部分もあるであろう（岩堀のこの作戦については、清水、前掲書、157-8頁、を参照）。

クの中で多くの人々の眼に触れていたことを窺うことが出来る。

「私は国鉄奥羽本線新潟機関区の機関助士です。平凡は毎月二十三日にとどきますが勤務の都合で手に入らない時はもう終りです。それは僕より先に友達が読んで次から次へと渡って、誰がもっているかわからないという大にんきだからです。で、私の手に入る時は大好きな平凡はめちゃくちゃで、おまけにみんな機関車乗りですから真黒です。どうしたらいいでしょうか？」⁶²

「すばらしいニュースよ。私たちの町内では去る六月号より順番をきめて、青年子女の家から、老夫婦の家庭まで、平凡回覧をはじめました。平凡君には、おつかれで御苦労さんなのですが、でもみんなに喜んで戴けるので幸福ね」⁶³。

「僕は鳥取県の片田舎に住んでいる愛読者の一人です。毎月のことですが二十二日の発売日を楽しみに町に求めに行きます。ところが帰るなり、見せてくれ、見せてくれ、といわれます。悪い気はしませんが、まア明日にしてくれとその後は一通り目を通し、翌日かしてやりますが、持っかえたらそれっきり、取りに行くと又貸しで、次のお友達が読んでいるという。そこへゆくと、また次だ。ぐるぐる廻って村内を旅行してしまう。まさに平凡村内旅行という図です」⁶⁴。

更に職場や地域のグループで『平凡』を受容している、という投書が多いことからそうした形での受容も多くあったと見る事が出来る。

「友の会野球ファンの皆さん。私は郵便局の一事務官です。先月局員の平凡ファンにより凡人クラブという野球チームを編成しました。他局の平凡ファンのチームと昨日試合をしましたが、熱戦の末我が凡人クラブが五対三で勝ちました。(三文略) 近隣の平凡ファンチームよ、ふるって挑戦せられよ」⁶⁵。

「私は工場の技術養成工です。工場の昼休みに友人が読んでいた平凡の魅力にスッカリとりこになり、今では平凡が私の恋人です。工場の友達を調べてみると、平凡の恋人が多く居ました。そして、誰からともなく『平凡会』が組織され、毎号の平凡を持ち寄って、小説の批評や歌の練習、はてはセ

⁶² 「平凡友の会」『平凡』1951年2月号、210頁。

⁶³ 「友の会」『平凡』1951年9月号、185頁。

⁶⁴ 「友の会」『平凡』1952年3月号、191頁。

⁶⁵ 「平凡友の会」『平凡』1950年9月号、162頁。

ンペイをたべながら歌をうたって和気あいあいと月一回の夜をたのしんでいます」⁶⁶。

「私たちの部落でも平凡ファンが十二名いますが、書店まで約一里ありますので、一人ずつ交代で毎月買いにいきます。私たちグループは発売日を平凡デーとして、その夜は平凡について座談会などを行っています。他にこんなグループがありましたら文通したいものですね」⁶⁷。

「このあいだ近くの村でおまつりがありましたが、そのおまつりに僕たちグループの楽団フラワーシスターズが招かれました。皆紺のありあわせの背広に、平凡のバッジをつけ、ありあわせの白のトレーニングパンツをバンドのユニホームにしての熱演でした。最初のテーマソングは勿論、平凡の歌、でした。一曲ごとにやんやの拍手をうけ、村の平凡ファンの人たちから、激励の言葉や花束をいただきました。僕たちグループの秋まつりの一コマです」⁶⁸。

家庭やこうしたグループでの受容は、人との触れ合いを伴う共同体的な経験であった。更に、前章で検討したように、歌を歌ったり批評をし合うことで声を出す、1つの場所に集い合う、或いは誌面を見ながらラジオを囲んで聴く、という共振性を伴っていたのである。『平凡』の共同体的受容形態とこの共振性は分かちがたく結び付き合っていた。

グループでの受容は読者組織「平凡友の会」支部組織に発展した。10万人以上の会員を擁した「友の会」に顕在的に現れた読者の連帯意識については別稿に譲るが、この読者同士の触れ合いは直接に顔を合わせるものだけではなかった。読者層の核に編集者を巻き込んだ連帯意識が存在していたことは別稿で既に指摘した⁶⁹が、先に見たグループでの受容のほかに、愛読者同士での文通も広範囲に見られた。この「平凡友の会」の名簿を通した大規模な文通が見られたほか、1952年10月号にできた文通希望欄「お便り交換室」を介した文通も広範囲に見られた。たとえば京都大学経済学部の学生であった西村和義氏は「西村一雄」名の文通希望の投書が1953年7月号の「お便り交換室」に掲載されたことから1年間で1150通もの手紙を国内外の読者から受け取った。西村氏は京大や同志社の学生150名以上を集め返事を書くサークルを結成し文通運動を行った。やがて、返事を受け取る側の女子工員といった人達のサークルも静岡や仙台で生まれたという。西村氏は返事を書くだけでなく、「お便り交換室」に投書が掲載されていた他の投稿者にも手紙を出しどれくらいの手紙が送られてきたの

⁶⁶ 「友の会」『平凡』1951年3月号、194-5頁。

⁶⁷ 「友の会」『平凡』1952年5月号、199頁。

⁶⁸ 「友の会」『平凡』1954年1月号、173頁。

⁶⁹ 拙稿「『平凡』読者の連帯と戦後大衆文化」

かを尋ねているが、それによると 500 から 600 もの手紙が届いていたのだという⁷⁰。西村氏の他にも 1000 通を越える手紙が届いた例、或いは文通や友の会活動がきっかけで結婚した例が当時の誌面でも紹介されている。本稿で検討している時期のあとであるが、手紙の書き方・時候の挨拶・手紙を巡る身の上相談などが掲載されるとともに文通希望者が趣味別・地域別に掲載された「ペンフレンドブック」も付録として作られている。

人びとのこのような連帯意識は、同時代に幅広く見られ 1955 年にピークを迎えたサークル活動に象徴される人びとの連帯意識が雑誌を介して顕在化したものだと思う⁷¹。実際昭和 30 年代の誌面においてはそうしたサークルが取りあげられている。最も取りあげられておりまた活動規模が最たるものであったのが、最盛期に 32000 人もの会員を擁した「若い根っこの会」であった⁷²。

以上から、『平凡』は、「見る雑誌」というだけではなく「読む雑誌」「聞く雑誌」（江藤⁷³）「歌う雑誌」「（投書や手紙を）書く雑誌」「（愛読者と）語る雑誌」「集う雑誌」だったと言えよう。そして、2、

⁷⁰ 上坂冬子・西村一雄「文通でやれること」『思想の科学』1954 年 8 月号、39 頁。西村氏の文通運動に関してはこのほかに、西村一雄「乙女たちは考える——『平凡』読者との文通——」『思想の科学』1954 年 5 月号、「自分の仕事に誇りを（女子工員の劣等感について）」『人生手帖』1954 年 9 月号、「孤独と絶望からぬけ出す道——生きる疑問に答えて——」『人生手帖』1954 年 12 月号、鶴見俊輔「若い友の肖像」『婦人公論』1955 年 1 月号、日高六郎「言論の自由とマスコミの問題」『世界』1955 年 2 月号、久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想——その五つの渦——』岩波書店 1956 年、加藤子明「“ペン・フレンド”のゆくえ」『婦人公論』1956 年 12 月号、西村一雄「ペンフレンドの問題をめぐって」『新女苑』1957 年 5 月号、西村和義「国内の溝埋めから外国との溝埋めへ」『思想の科学』1986 年 5 月号、「思想の科学と出会い 40 年 人間の信頼と一歩前進」『思想の科学』1992 年 8 月号、ほかを参照。鶴見俊輔は 1955 年当時西村氏のことを「この人が今も優しい思いやりを失わずに、実務を身につけた大人になることができれば、日本の思想は、新しいタイプの担い手をもつことになるのではないか」と述べている（「若い友の肖像」、290 頁）。事実、西村氏は文通運動及びこの前年に行われた帰郷運動で培われた信念をこのあと半世紀以上もたった現在までも貫き、日本とアジアの民間レベルでの交流を推進されている。氏のライフヒストリーに関しては、西村一雄「労働者の中で——職場の記録——」『思想の科学』1954 年 8 月号、「『ふるさとに帰る』とは何か——ある体験者の立場から——」『思想の科学』1960 年 9 月号、西村一雄・菅井幸雄・後藤総一郎「『学生商品論』の可能性とリアルな未来像を語る」『駿台論潮』明治大学駿台論潮編集部 1961 年 9 月号、西村一雄「優等主義の敗北」『思想の科学』1963 年 10 月号、西村和義「ボルネオ よいところ」『思想の科学』1980 年 4 月号、「鳥取での出会い」『思想の科学』1987 年 6 月号、ほかを参照。氏には 2000 年 7 月 26 日インタビューに応じていただいた。

⁷¹ 拙稿「『平凡』読者の連帯と戦後大衆文化」

⁷² 当時の「若い根っこの会」においては芸能人を交えた多彩な活動が活発に行われ、それが活字メディアだけではなくテレビ・ラジオ・映画等でも取り上げられ、社会現象となっていた。同会会長加藤日出男氏によると、当時最も同会を取り上げていたのが『平凡』『明星』であったという（加藤「集団就職」エコノミスト編集部編『証言・高度成長期の日本』（下）毎日新聞社、1984 年、164-5 頁）。『平凡』には同会のスケジュールを紹介するページが存在していた（拙稿「戦後日本における『勤労青年』文化——『若い根っこの会』会員手記に見る人生観の変容——」、106 頁）のをはじめ、身の上相談には度々加藤氏が登場していた。加藤氏によると青年勤労者の間で『平凡』『明星』は人気がありとくに歌本の人気は高かったという（1999 年 9 月 26 日。加藤『根っこ もう一人ぼっちじゃない』根っこ文庫太陽社、1962 年、24 頁、も参照）。

⁷³ 江藤『見る雑誌する雑誌 平凡文化の発見性と創造性』、94 頁。

3章で概観したようにこれらの共同体の経験は共振性と不可分に結びついていたと言える。そして2-4で見たようにこの受容経験はのちに失われていった。またこの受容経験は、『平凡』にだけ見られたものではなく、1-2で述べたようにほかの大衆雑誌においても広範に存在していたと言えよう。

4 考察

我々は序章において『平凡』には2度の部数の躍進期があり1度目が1950年代前半で2度目が1970年代前半であることを見た。そして、第1の躍進期における受容経験に、より重要性があるのではないかと考えた。その上で、1950年代前半の『平凡』の受容形態においては共振性と分かちがたく結びついた共同体の受容があったのではないかという議論を、2・3章に渡って展開してきた。序章で見た『平凡』の相対的位置の低下からも、この共同体の経験は第2の躍進期にはかなり失われていたのではないと思われる。

周知のように、近代日本における書物の受容形態において明治30年代が従来の音読から黙読への移行過程においてひとつの転換点をなしたとされている⁷⁴。この議論の先鞭を付けたのは、リースマン⁷⁵に依拠した前田愛の研究である。この研究の中で前田は、小説の音読を伴った共同体的な受容が黙読を伴う個人的な受容に移行したのがゆるやかなテンポで進行したこととの対比として、昭和30年代におけるラジオの受容の変遷を取りあげている。茶の間に置かれた1台のラジオに家族全員が聴きするという受容形態はテレビの普及とトランジスタラジオの発明に伴い個室での享受に移行した。前田によると小説の共同体的な受容の解体が進行したスピードに比較してラジオのそれは10年間というかなり早いものであったという⁷⁶。前田は戦後日本における書物の受容形態についてこの研究では触れていないが、大衆娯楽雑誌を代表する『平凡』の第1の躍進期における受容形態はまさに音声を伴う共同体的なものであった⁷⁷。見田の言う「構造的な変化」が本格的に起こる以前大衆雑誌の受容に

⁷⁴ 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997年、72頁。

⁷⁵ リースマン（加藤秀俊訳）『孤独な群衆』みすず書房、1964年、「伝承・文字・映像」『何のための豊かさ』みすず書房、1968年。リースマンによると、社会的性格は伝統志向型の段階から内部志向型の段階を経て他人志向型の段階に移行する。そして彼は、それぞれの型に対応するメディアとして、伝統志向型においては炉辺の物語を、内部志向型においては活版印刷によって作られた書物を挙げ、他者志向型においてはラジオなどのマス・メディアを挙げている。

⁷⁶ 前田愛『近代読者の成立』岩波書店、1993年、175頁。

⁷⁷ 前田は近世における人情本の読者が「歌舞伎・音曲・噺・講談等、民衆演芸の複製・縮冊・再現を紙上に求める読者」であったことを指摘している（前田、前掲書、173頁）。この指摘は、誌上においてグラビアと読み物とラジオの音声が入体的に交差した『平凡』を彷彿とさせよう。なお、近代日本における読書形態の変遷に関しては佐藤健二『読書空間の近代 方法としての柳田国男』弘文堂、1987年、永嶺重敏『モダン都市の読書空間』日本エディタースクール出版部、2001年、も参照。

はこうした経験があり、人びとは大衆雑誌にそれを求めていたと言える。その熱意の高さが、序章で見た「読書世論調査」におけるこの時期の相対的位置の高さに結びついていた。そして1959年以降のテレビの本格的な普及とともに「構造的な変化」が根本的なかたちで起こると、受容経験も変化し相対的位置も低下していったのである。

我々は先に『平凡』が共同体的にまた共振性を伴って受容されていたことを目の当たりにした。1-1で見たように『平凡』のあと新たな大衆雑誌が読者を獲得し模倣誌がそれに続くことで、大衆雑誌は分化していった。戦後大衆雑誌の原点における受容を明らかにすることが本稿の課題でありこれ以降の雑誌受容の変容の詳細を明らかにし考察することは本稿において設定された課題の埒外である。だが、大まかには、以下の3点のことを言うことが出来るのではないか。それはまず第1に、対象が性別・階層・趣味趣向などによってセグメント化されていくことである。第2には、共振性を伴った共同体的受容ではなく「(見開きの頁を)眺める」という受容が一般化していくことである。第3には、身体を動かすことによる受容においても、ひとり或いはごく少人数で行う形のものが多くを占めるようになることである。たとえばショッピング・デートマニュアル・グルメ・旅といったものなどである。スポーツが誌面において取りあげられている場合でも、それは大抵ジョギングやテニス・スキーといった一人もしくは少人数でおこなうものが主となっている。

付記 本稿執筆にあたり本文及び注で御名前を挙げさせていただいた方々には多くのことを教えていただいた(なお、所属・役職などはインタビュー当時のものである)。とくに高木清氏には『平凡』や芸能に関する事実関係を度々教えていただいただき、『平凡』最後の編集室長である浜崎廣氏には雑誌研究者としてのお立場からも貴重な御教示をいただいた。また、甘糟章氏・清水正晴氏をはじめ多くの関係者の御協力を得て、本研究は進めさせていただいている。御協力を下さっている皆様に感謝したい。とくに、日頃から筆者の研究に対し深い御理解とあたたかい励ましを下さっている新井恵美子氏・木滑良久氏・中丸巖氏には深く御礼申し上げたい。

(さかもと ひろし・博士後期課程)

The Acceptance of Popular Magazines for Amusement during the First Half of the 1950's: The Acceptance of "Heibon" through Communities

Hiroshi SAKAMOTO

In this paper, I examine "Heibon", a popular magazine for amusement, during the first half of the 1950's to understand its acceptance. Until its discontinuance in 1987, it had two periods of enlarging its circulation. The former is the first half of the 1950's and the latter is the first half of the 1970's. The data of public opinion polls about "Heibon" indicate that the relative order among people of the former is higher, therefore it is more important. In addition, the acceptance of "Heibon" in this period has importance for two reasons. First, "Heibon", which was founded in 1945, is the origin of magazines of "Magazine House", which later launched important magazines of youth culture in post-war Japan - "Heibon Punch"(1964), "anan"(1970), "POPEYE"(1976). Second, during the first half of the 1950's, "Heibon" had influence on the existing popular magazines and it started to be imitated in large numbers. In this period, before the communication of Japanese people drastically changed, what experience did they have from "Heibon"?

"Heibon" had two important themes, popular songs and movies, so it was tied up with both radio (a medium of songs) and cinema. And it had two main elements - photogravures and serial stories. The former changed distinguished film stars to familiar celebrities. In addition, the words of popular songs were printed in "Heibon" to be connected with radio. This led to a collection of songs, "Utabon", as well as the radio program "Heibon Hour". In this period, radio was listened to by all members of families, this program enabled them to sing, looking at photogravures and listening to the radio program tied up with them. As a result, in this acceptance by communities, people acted together. Serial stories were printed in order to be made into movies. And some of them were related to radio dramas. I suppose these were read by family members sitting around the radio. This kind of acting goes back to the acceptance of novels by communities (that is, one is reading aloud and the surrounding people are listening to him or her). As we see, as to both novels and photogravures, in the acceptance of "Heibon" through communities of the first period, the readers acted together. In the second, serial stories were not published any more, but

photogravures became the main elements of this magazine. And its relative position among people was lower in the second period than in the first one. From this one may conclude that higher position of the first period was related to the acceptance by communities.

"Heibon" in the first period was read mainly by young people, and partly by older people too. "Heibon" was accepted through communities - families and groups. In addition, in this acceptance, they acted together - they did not only "sing" and "listen to", but also "come together".

As we see, the readers received "Heibon" through communities acting together during the first period. But this disappeared due to the structural change of communication during the high economic growth. As a consequence, new popular magazines divided the readers and came to deal with trips and shoppings which can be done alone or with a few friends. In the acceptance of these new magazines, readers don't act together any more but they passively enjoy reading, merely by "seeing gravures".